

---

# 神に見捨てられたのか？

トウヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神に見捨てられたのか？

### 【Nコード】

N11880

### 【作者名】

トウヤ

### 【あらすじ】

人間と神 それらが共に生きることが許されない。

故に人間が神の世界に、神が人間の世界に入ることが禁忌である。

ある時、一人の神が人間の世界へ堕ちてしまう。

そこからだ……全てが狂いだしたのは。

## 001 眞実を知る者は慈悲深い少女

人間と神。絶対的な格の違いを思わせるそれらは、同じ世界に存在してはならない。

前者が住まう人間界、後者が住まう天界　交じりあうことは出来ないのだ。

十月四日午前三時二分十五秒。

この時、一人の神が誤って地上に墮ちてしまった。

神が人間の世界に存在することは、一秒たりとも、許されはしない。

この世の創始者　おおかみ大神は、墮ちてしまった一人の神が天界に戻った後、人間界の時間のリセットを行使した。

緊急手段である『時間のリセット』　単に時間を戻すだけである。即ち、神が墮ちる前の時間に戻すということだ。

十月四日午前三時三分一秒。

時は戻り、神が墮ちたという失態は、天界だけの事実となった。

「へえーこんな情報あったのか。うわっ、マジかよ。……明日雨かあー、今日は快晴だったのになあ」

十月四日午前一時。

パソコンの液晶画面だけが唯一の明かりとなっている薄暗い部屋。そこで、ぶつぶつと独り言を呟きながら、パソコンを見つめる奇

異な男　それ即ち俺である。名前は忌崎龍だ。

俺は半目で、画面に映った文字列を目で追いながら、時に笑ったり顔をしかめたりと、独り喜怒哀楽な表情を見せていた。

「　龍。そろそろ寝た方がいいんじゃないのか」

ピ、という効果音と共に画面に表示された文章。

それを見て、俺は苦笑し、マイク付きヘッドフォンを指で調節した。

「松岡さんも人のこと言えないだろー。明日は仕事って言ってませんでしたっけ？」

わざと、おどけた調子で喋ってみる。

これはボイスチャットというもので、一方がキーボードで文字を送り、もう一方がマイクで受け答える。もちろん、その逆も、お互いがボイスでも可。

通話相手の松岡さんは、俺のいつこ上。俺が高校三年だから、彼は大学一年だ。

「　俺の仕事は始まるのが遅いからいいんだよ。お前は五年ぶりに妹さんと会うんだろ。朝早いことを考えたら、今寝といた方がいいだろう」

再び表示された文章を見、俺はそれを思い出した。

松岡さんの言うとおり、明日　否、今日か。朝早くに、県外の実家で暮らしていた妹が、我が家に遊びに来る予定なのだ。

何故そんな大事なことを忘れてたんだ、と俺は嘆息した。　　まったく……五年ぶりだぞ、五年ぶり……。松岡さんの言うとおり、さっさと寝ないと、起きれなくなるな。

「じゃあ、俺寝ますよ。松岡さんも早めにね」

「はいよ。バイビー」

別れの挨拶を交わし、俺はヘッドホンを外した。

電源ボタンを押し、パソコンを終了させると、凄まじい眠気に襲われた。

元々明かりになっていたのがパソコンの液晶画面だけで、電源が切れると部屋は暗黒に包まれ、それが眠気を促進させたみたいだ。

しかし、このままデスクで寝た……ら……。

「ムリ……」

起き上がることは、正直無理だった。

目を瞑ると、風船の空気が抜けるように力が入らなくなり、意識がもつろつと

家の前に停まった宅配トラックの轟音で目が覚める。

眠い目を擦りながら部屋を見回すと、一時過ぎを刻む目覚まし時計が目に入った。

「えっ、一時？ 一時って……え、えっ？ あれ？」

全てを把握した俺は、飛び上がった。その拍子に右足の小指をタンスの角にぶついたり、携帯充電器のコードに足を引っかけたり、舌を思い切り噛んだり等々……かなり悲惨な目に遭っていた。泣きたい。

「ううがあつ。いつてえ……！」

噛んだ舌の痛みに悶々とする間もなく、目覚まし時計が左足の小指に落下した。本当に泣きたい。……しかし俺は男だ。零れ落ちそうな涙を必死に目にしまふ努力をした。

何とか痛みと泣きたい衝動は収まった。しかし、一難去ってまた一難とは、まさにこのこと。痛みと涙の後にやって来たのは、焦りだった。

現在の時刻 午後一時二十五分。妹が訪問するのは朝八時。これは大遅刻を超えたスーパー大遅刻だ。

「のわアっ！ いつつー！」

急いで下の階へ向かおうとするも、俺は床に脱ぎ散らかしていた靴下を踏んで横転してしまった。今度は耐える前に涙が出てきた。

満身創痍になりながらも、何とか部屋を出る。その後も、俺は騒々しい音を家中に響かせながら、一階のリビングに行く為に階段を駆け下りていった。

リビング行くだけで体中がボロボロになるってどうなんだろう。

俺はそう思いながら、リビングでテレビを見ている親父に話しかけた……のだが。

返事はなかった。

「おい、無視すんなよ親父。あまりにも起きるのが遅いから怒っちゃいましたかー？ つーかアキ（妹）はどうしたよ。まだ来てねーのか」

返事はない。

親父はまるで屍になったかのように、俺の問いかけを無視し、呆然とテレビの野球中継を眺めていた。

おいおい、遂に家族内のいじめが始まったのか　そう思ったが、俺は俺が親父にいじめられる要因を見出すことが出来なかった。

「親父！　く、そ、お、や、じ！」

ガン無視だ。

何かがおかしい……。そもそも、何故妹が来てないんだ。

まさか、新手のドッキリか？　ドッキリなのか？　……んな馬鹿な。

「そうだ。母さん！　母さんは？」

俺はリビングを飛び出し、台所へ向かった。

廊下を走っていると、料理をする音が耳に入り、俺は安堵の息を漏らしながら、台所で昼食を作っている母さんに話しかけた。

しかし、返事はなかった。

「母さん、母さん！」

無言で料理を続ける母親。

妹がいない……。両親に無視される……。悪い夢かと思い、咄嗟に自分の頬をつねってみた。痛い。

「……夢じゃないのか。何だ、これ」

次の瞬間、俺は悲鳴を上げた。

母さんが俺に向かって歩き出し、その体をすり抜けたのだ。肌と肌が触れ合う感覚、それが全く感じられなかった。

「何だ、何だよ！ どうしちまったんだよ」

俺は息を荒くしながら、自室へと駆け戻った。

部屋に戻ると、あることに気づいた。

デスクに置いていた携帯電話。そのバイブが起動している。

慌てて携帯を取り、通話相手を見ると『非通知』になっていた。

怪しい。怪しいが、両親に無視され、触れることも出来ない今、

頼れるのは存在が消えかけている俺に電話をかけてきた……この人だけだ。

通話ボタンを押し、恐る恐る携帯を耳に当てる。

「も、もしも……」

「あ、通じた。忌崎龍さん、聞こえますか？」

俺は電話をかけてきたのは女神か、と一瞬思ってしまった。

聞こえてきたのは、現在起きている超常現象を忘れさせてくれるような、美しく透き通った、天使とでも言ってもいい女性の声だった。

何故この人が俺の名前を知っているんだ、という疑問をかき消すぐらい、綺麗で印象的な声だった。

俺は上手く喋ることが出来ず、

「ああああの、えっと……あなた、誰、だ……？」

何とも失礼な対応をしてしまった。

「落ち着いて聞いて下さい。私はガルーダと申します。天界からなので、ノイズが入るかもです。もし聞き取れなかったら、すぐ言って下さいね」



混乱する俺に、女性は相変わらず綺麗な声で、やや早口に説明した。

日常的に聞き慣れない単語が出てきて、俺には何が何だか理解出来なかったが。

何も返事しないのもあれなので、とりあえず曖昧に応えてみる。

「いえ、多分聞こえます、けど……」

「そうですか。よかった。あ、ちなみに、これはアラシヤ大佐の目を盗んでの連絡です。いつ切れるか分かりません。ご了承下さいね」

意味が分からない。てんかいつて何だ。何処か遠い場所なのか。そもそもガルードって……。外国人の名前っぽいのが、喋り方からして日本人だ。それとも何かと聞き間違えたか？ じゃあ、てんかいつても俺の聞き間違えか？ ……でも、アラシヤ大佐って言うてなかったか。大佐って、つまり軍人なのか？

「やっぱり混乱してますよね……？ 突然人に触れなくなったり、無視されたりするなんて、そりゃ気がおかしくなりますよ……」

今、ガルードという女性が言った台詞を、俺は聞き逃さなかった。俺は慌てて食いついた。

「それ、どういうことですか!？」

「ああ、えと、どこからご説明すればいいやらで……。貴方が私の言葉を信じるかどうかでご説明する意味も……」

「信じる、信じます!」

「 分かりました。では、貴方の身に何が起こったのか、ご説明  
します」

俺は唾を飲み、彼女が言葉を紡ぐのを待った。

次の瞬間 俺は驚愕の事態に耳を疑うことになる。

「 貴方が存在している世界は、もう人間の世界ではありません」

## 002 不条理に抗うは別離した兄妹

貴方の存在する世界は、もう人間の世界ではありません。

俺は言葉を失った。

冷静に考えれば、馬鹿馬鹿しい話だ。しかし、少しでも情報がほしいこの状況では、これは信用せざるを得ない。

信用した後頭に浮かんだものは 恐怖。

「人間の世界じゃないって……どういうことだよッ!？」

震える声で怒鳴り散らす。

初対面なのに、とか、そんなことを気にする余裕は毛ほどもない。

「 神と人間、共存許されず。人間が神の世界へ、もしくは神が人間の世界に現れた場合、世界の秩序は崩壊するとされています。数時間前 私の上司であるアラシヤ大佐が、誤って人間の世界に堕ちてしまいました」

この馬鹿らしい話に留まらず、神をも信じろってことか？

いや、待て。それだと、今俺が話している相手 ガルーダは…

…。

俺は恐る恐る、訊いてみた。

貴方は、神なのか……と。

「 はい。私は、天界に住まう神 ガルーダ少尉です」

神を名乗った彼女の返答は、あまりにも軽い口調だった。

しかし、俺が疑問に感じたのは、彼女が神か否か、ということだ。

はない。彼女の名に付いている肩書きだ。

「少尉って、まるで軍人じゃないか……？」

「神の世界である天界にも、地位、階級というものがあるのですよ。人間の階級と同じなのは、多分偶然です。私には難しいことは分からないので」

「いや、そんなことはどうでもいい。とにかく、今俺が置かれている状況を教えてくれないか」

「ええ。簡単に言うतすね、忌崎龍さんは、時間のリセットについて行けなかった人間なのですよ」

「時間の……リセット？　なんだ、それ」

「そのままの意味です。聞き慣れない言葉ばかりで混乱するかもですが、聞いた通りで捉えて下さい」

「……ゲームとかについてるリセット機能ってことか？」

「その通りです。えと、つまりですね、私たちの中で一番偉い人が、神が堕ちたことをなかつたことにしました。その為には、貴方の存在する世界の時間を戻す他、手段がなかつたのです」

「なら、俺はその……リセットされなかつた人間……？」

「はい」

あっさりと肯定するガルーダ少尉。

あまりに現実離れた話すぎて、俺は何も言えずにいた。

しばらく、沈黙が続く。

「私がお伝えしたいことは、この話の先です」

沈黙を破ったのは、ガルーダ少尉だった。

俺は深呼吸をして気持ちを静め、ベッドに腰を下ろした。さつきみたいに、動揺しないよう、心を引き締める。

「なんだ？」

なるべく落ち着き払っているように見せる。

気持ちガタガタなのがガルーダ少尉に見破られれば、余計な心配を与えてしまいそうだし。

「本当は、こんなことをしちゃいけないんですよ……。私が人間と電話でお話するなんて……」

唐突に、小声に切り替えるガルーダ少尉。

……神が人間と共存してはいけないとされているんだ。通話なんて、もつての外だろうな。

それにしても、何故彼女は俺にこんなことを教えてくれたのだろうか。

訊いてみよう。

「それは……内緒です」

「へ？」

「 ああう、もうっ！ とにかく、貴方はその世界から出ないと、消えちゃうんですよ！ その体も、皆からの記憶からも、何もかもが、です！」

「へ！？」

おいおいおいおい！ 何か凄く怖い話聞かされた気がするぞ！  
存在が消えるって……。このままだと俺、いなくなるってことじやねーか！

「何か助かる方法はないのか！？」

「お、落ち着いて下さい……。今からそれを説明します」

！……そうだ、彼女の言う通り、落ち着け俺。  
もう一度、深呼吸だ。

日曜日。午前六時。何とも目覚めの良い朝。

今日は、お兄ちゃんに会える。

五年ぶりだ。元気にしているだろうか。

私は私服に着替えると、台所に入った。

朝食を作っている叔母 お母さんのお姉さんに挨拶したくて。

「おばさん、おはよう！ 今日早起きしたよっ。お兄ちゃんに会う時に眠くなっちゃったらダメだもんね」

私は後ろから、非常に高いテンションで話しかけた。  
そんな恥ずかしい私の行動とは裏腹に、おばさんからの返事はなかった。

「……おばさん、どうしたの……？ おばさんってば！」

幾ら呼んでも、無反応。

居候の身だから、嫌われちゃったのかな……？

でも、とても優しいヒトだし、無視するなんてことしない筈なんだけど。

「あ、あれっ？」

おばさんの肩に、そーっと手を伸ばしたけど……。  
触れない。  
手がすり抜けた。

「ええっ!？」

予想外の出来事に驚き、思わず後ろに置かれていたテーブルにぶつかってしまった。  
テーブル上に大量にあった茶菓子が床に落ち、騒々しい音を立てる。

「あらあら、どうしたのかしら」

「ひゃあっ!？」

おばさんが振り返り、私に手を伸ばしたと思ったら、その手は体

を抜け、茶菓子を掴んだ。

おばさんは、茶菓子が落ちた理由が分からないのか、眉をひそめ、首を傾げた。

私は家を飛び出し、道行く人に声をかけた。

返事はない。そして、やはり触れることができない。

……私、ここに存在してないの……？

誰とも話せず、触れられず、過ごさなくてはならないの……？

嫌だ。そんなの、嫌だ。

お兄ちゃんとも話せなくなるなんて嫌だ！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1188o/>

---

神に見捨てられたのか？

2010年11月3日01時27分発行